



Art. Culture. Tradition

52

〔発行〕札幌市教育文化会館

アクト第52号

FEBRUARY 2026

謡
UTAI

謡（うたい）

音楽はあらゆる人々が享受できる数少ない文化です。先史時代から存在していたと言われる音楽は、それぞれの言語や土地の風俗を背景に進化を繰り返し、多彩な技法で表現され現在の私たちの耳へと届いています。

今の日本で私たちがよく耳にする音楽は、西洋音楽をルーツとしたものが大半を占めていますが、伝統芸能である能楽の世界を見ると、西洋的な音楽の概念とは全く異なるアプローチをしている「謡（うたい）」という芸術が存在します。今号では他にはない独自の進化を遂げてきた「謡」の世界の一端をご紹介します。

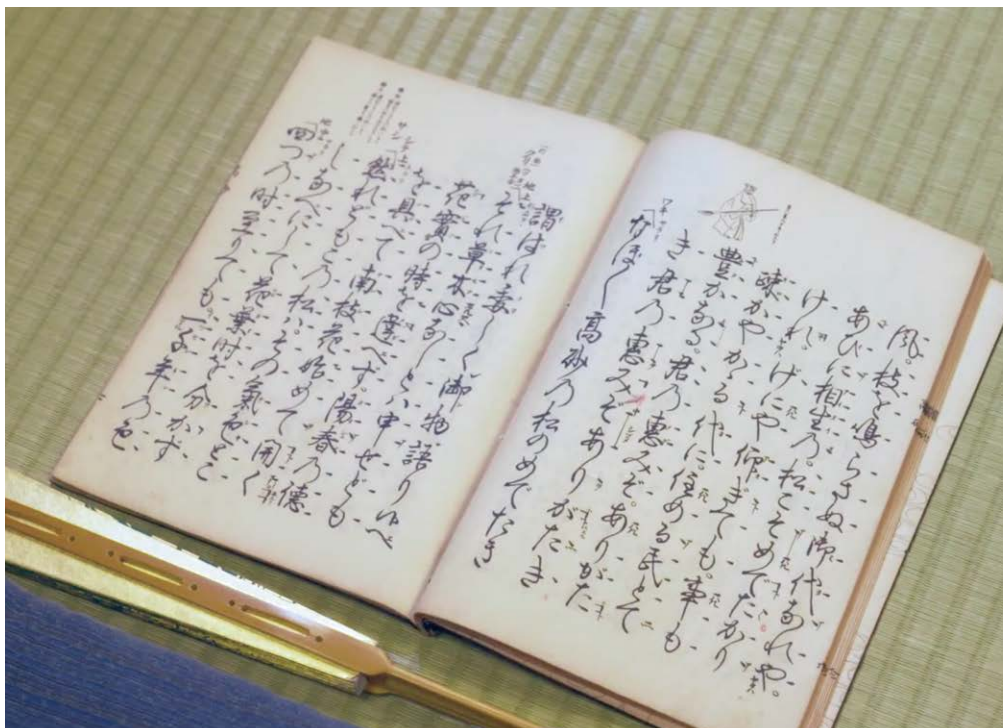




写真:能楽大連吟実行委員会より提供(撮影:上杉遥)

立方の謡

能舞台に登場するシテ・ワキ・アイなどの役者が、自らのセリフや心情を一人称で語る声楽部分を指す。能では物語の進行が詞章(セリフや謡)によって語られるため、立方の謡は物語の核となる。語りと歌の中間のような独特の節回しをもち、古語の詞章を用いて情景や感情を詩的に表現する点が特徴である。また、立方の謡は同じ舞台に座る地謡と掛け合いながら進行し、舞や所作と密接に結びついて能全体の構成を形づくる重要な要素となっている。



写真:能楽大連吟実行委員会より提供(撮影:上杉遥)

地謡の謡

地謡(じうたい)は、能舞台の上手(舞台向かって右側)に座り、物語の情景や登場人物の心情を謡うことで表現する声楽部分を担当する。舞台には登場しない第三者の立場から、出来事の描写や物語の進行を担い、ときにシテやワキとの掛け合いも行う。通常前後二列に並び、中心となる地頭が全体のトーンやタイミングを統率する。能の音楽は謡と囃子で構成され、地謡はその中核として舞台全体に厚みと抑揚を与える重要な役割を果たしている。



写真:能楽大連吟実行委員会より提供(撮影:上杉遥)

大連吟

大連吟(だいにんぎん)とは、謡を多数の参加者が一斉に合唱する催しである。能では二人以上で同時に謡うことを「連吟」と呼ぶが、大連吟はその大規模版にあたり、一般参加者がプロの能楽師の指導を受け、数か月の稽古を経て本舞台で謡う点が特徴である。取り上げている曲は祝言性の高い『高砂』など。謡を通じて日本文化を学び、世代や国を越えた交流を広げることを目的とした文化プロジェクトとして2008年に京都で始まり、全国へ広がっている。

謡

UTAI
in traditional Japanese performing arts

世界中には様々な歌唱法が溢れていますが、日本の「謡」はそれらとは一線を画す表現方法と言えます。旋律の美しさを追求する一般的な歌のイメージを持って聴くと、その表現の特異さとともに、不思議なほど感情を喚起させられることに驚くはずです。この声の芸術「謡」はどのようなものなのでしょうか。

それ以外にも日本語の美しいリズムである七五調の12文字を八拍子で発声するリズムの取り方や、息とともに声を出す独特の発声法などにも一定のルールはありますが、どれも相対的なものであり「こうでなければいけない」という絶対的なものではありません。正解を表現するために型にしっかりとハマらなければ成立しない芸術もありますが、謡は型を用いて、その瞬間の自他との関係性の中で表現を行う芸術と言えるでしょう。600年以上続く伝統のもと、常に表現を更新し続けているからこそ能は多くの人の心を掴み続けているのです。

暮らしの中の謡

江戸時代、武士のものだった能を庶民が観ることはなかったといわれていますが、木版印刷の技術が進歩し、謡本が作られたことで謡が全国に広まりました。やがて謡曲の一部を謡う「小謡（こうたい）」が流行し、習い事や謡を披露する「謡講（うたいこう）」が盛んに行われ、庶民文化として根付いていきました。

どれほどの人気だったのかは、私たちが今も耳にする「千秋楽」や「ノリがいい」といった言葉が謡によって広く使われ始めたと言われていることから窺い知ることができます。結婚披露宴で新郎新婦が座る席を高砂と呼びますが、これも能の演目『高砂』が夫婦の深い絆と長寿を祝福する内容だったため、『高砂』の小謡が祝言で頻繁に謡われていたことが由来です。祝言に限らず冠婚葬祭や飲みの席などさまざまな場面で小謡は謡われてきました。それぞれの場で定番と言われる謡曲があり、そこにいる人々の喜びや祈りが謡に託されていました。

「謡」に触れてみることは、遠い過去から続く日本人の感性を再発見することにつながるかもしれません。それとともに触れるたびに新しい発見が待っている。そんな奥深い世界が、あなたのすぐそばに広がっています。

能における音の役割

能を鑑賞すると演者の舞や面といった視覚から入ってくる表現に心を奪われますが、それとともに印象に残るのが耳から入ってくる音の数々。歌うようにセリフを話し、舞とともに聞こえる足音、衣擦れの音など静寂の中に鳴り響く音はどれをとっても能の世界を作りあげる重要な要素です。音は演者が発するものだけではありません。囃子方と呼ばれる人たちによる笛や太鼓の音、地謡と呼ばれる人たちによるコーラスのような声、これら全てが一体となることで能の豊かな表現が生み出されています。

これらの役割の中で肉声で言葉を紡ぐ部分を担っているものが「謡（うたい）」です。能は演者であるシテやワキによって登場人物のセリフが語られ、場面ごとの情景や登場人物の心情、舞台上に登場しない第三者の出来事など、いわゆるナレーションのような部分を地謡が担当して物語が形づくられていきます。セリフやナレーションという会話のように喋っている様子をイメージしがちですが、謡は独特のリズムや謡い方などを用いて行われます。それは他に類を見ない唯一無二の声の芸術といえるでしょう。

西洋音楽とは違う謡の世界

肉声を使った芸術表現はたくさんありますが、現在私たちが学校で習う音楽は西洋音楽をルーツとするもの。西洋音楽ではドレミといった絶対的な音階を基本に、歌う声の高さを決めたりメロディを作ったりしますが、謡にはその音階が存在しません。教本である「謡本（うたいぼん）」にも音の上下の変化や、相対的な音域は書かれていますが、絶対的な指標は存在しないため、公演の際はシテや地頭が決めた音を基準にし、それらに合わせて発声していきます。その日の調子や役柄でも変化をするため、全く同じ謡が披露される舞台は存在しないのです。

謡における舞台上での役割

役割がきちんと別れた状態で舞台上上がる能。謡においてもそれぞれに役割があります。

シテ（主役）	自分が勤める登場人物自身の言葉としてセリフや心情を語る。ワキやアイとの対話なども行う。	地謡	物語の背景となる部分の説明やシテの深層心理を客観的に謡うナレーター的な役割。
ワキ（相手役）	現世の人間として物語の状況を説明し、シテの物語を引き出す客観的な役割を担う。	じ地頭 がしら	シテや囃子の調子を判断し、地謡のリーダーとして全体の呼吸やテンポを統率する。
アイ（狂言方）	能の中で狂言方が勤め、物語の設定や背景などを解説するなど話の展開を助ける橋渡し役を担う。	囃子方	掛け声による「間」で謡の呼吸を整えるとともに、言葉にならない感情を担う。

「謡」を聞き比べてみよう

言葉と音で表現される謡の世界は説明だけでは想像しきれません。説明とともに実際の能楽師による謡を聞いてみましょう。

音階・発声

強吟

強く息を出す謡い方。音階は狭いが力強い。勇壮な場面などで使用。

弱吟

柔らかな息遣いの謡い方。繊細で旋律重視。情緒的な場面などで使用。

リズム

フシ（節）

比較的はっきりした旋律がある謡

拍子不合

（ひょうしあわず）

拍子に合わせずに謡う。囃子が入らないこともある。

拍子合

（ひょうしあい）

拍子に合わせて謡い、原則として拍子をとる囃子が入る。

『謡』を聞いてみよう！

下記の二次元コードから、実際の能楽師による『謡』を聞くことができます。

【協力】観世流シテ方 松野 浩行

強吟の平ノリ

息を強く用いる強吟で、七五調十二文字を八拍に割る平ノリの謡。

（高砂）

強吟の大ノリ

息を押し出す強吟で、四四調八文字を八拍に配する大ノリの謡。

（船弁慶）

弱吟の平ノリ

旋律を重視する弱吟で、七五調十二文字を八拍に割る平ノリの謡。

（竹生鳥）

弱吟の大ノリ

装飾的な弱吟で、四四調八文字を八拍に配する大ノリの謡。

（羽衣）

コトバ（詞）

はっきりした旋律はないが、独特の節回しを持つ。セリフにあたる。

（高砂）

日常に存在している「謡」

『高砂』（たかさご）

阿蘇神社の神主が旅先で出会った仲睦まじい老夫婦から、離れた場所に生えていても夫婦である「相生の松」の伝説を聞いた後、姿を現した住吉明神によって長寿が寿がれます。松は長寿のめでたさや夫婦を連想させるため、非常に縁起の良い曲として古くから祝言などの祝いの席で広く謡われてきました。

『融』（とおる）

秋の名月の日、左大臣まで登りつめた源融（みなもとのとおる）の亡霊が生前の執着を持って現れるが、月夜に舞うことで執着を捨て月の都へと帰っていく姿を描いています。供養の場で謡われるとともに、月や潮の満ち欠けが永遠に巡ることから縁起が良いとされ祝言の席でも謡われました。

『鶴亀』（つるかめ）

新年に金銀で飾られた宮殿で、中国の皇帝が不老長寿の鶴亀と共に天下泰平を祝って舞う、極めてめでたい曲です。その縁起の良さから、能楽公演の最後だけでなく、日常でも結婚披露宴の祝謡や新年会、長寿の祝いなど、門出や繁栄を願う宴席で広く親しまれ謡われています。